橋口　亘

# Ⅲ　薩摩国加世田郷の地誌
## ―『再撰帳』に描かれた人々の生活 ―

### 1. はじめに

『再撰帳』（南さつま市加世田郷土資料館蔵）は、薩摩国河邊郡加世田郷の近世地誌類の一つで、書中に郷内各所の絵図を伴うことで知られており［相徳1986、松山1986[1]］、絵図は彩色画で［徳留・高津2000］、19世紀中葉頃に成立したものとみられている［橋口2017］。本稿では、この『再撰帳』から、当時の加世田郷における人々の生活がうかがわれるいくつかの絵図を採り上げて紹介してみたい。なお、本稿は『南日本文化財研究』№27掲載の拙稿［橋口2017］の一部分を基として簡単にまとめたものであり、詳細についてはそちらを参照されたい。

### 2. 龍護山日新寺の周辺図

図1は、加世田郷の麓付近に所在した龍護山日新寺の周辺が描かれる[2]。日新寺は曹洞宗寺院で、島津斎）の菩提寺［土持1939、鹿児島県1940］。寺の門の前にある広場には、黒色の法衣を纏った僧侶と考えられる人物と、箒で掃除する小僧あるいは使用人とみられる人物が描かれている［橋口2017］。

寺の前には、郷内益山村などの田を潤す田地用水溝（益山用水溝・加世田用水溝[3]）が描かれる。用水溝に沿う街道「鹿籠坊泊通路[4]」には、天秤棒のようなものを担ぐ人、笠を被っている人、荷馬を引く人など、人々の往来が描かれ、路上には犬と考えられる動物の姿も描かれる［橋口2017］。加世田郷内の

図1：龍護山日新寺の周辺図〔『再撰帳一の一』掲載「龍護山日新寺」絵図（部分）〕

1　日新寺仏殿（客殿・茅葺き）　2　鐘楼　3　山門（楼門・瓦葺き）　4　田地用水溝　5　鹿籠坊泊通路（鹿籠・坊泊へ続く街道）　6　川（現在の加世田川）　7　柿本地蔵堂　8　神力坊墓　9　御屋地上一ッ橋（六地蔵橋の前身）

諸河川には飛び石や一ッ橋などが置かれ［上東1964・1986b］、この図の画面下の川（現在の加世田川）にも、飛び石や素朴な御屋地上一ッ橋（六地蔵橋の前身）の姿が描かれ、人々がこうした簡素な施設を利用して渡河していたことがわかる。日新寺の門前や麓の一部が描かれた部分には、土蔵を備えた商家とみられる建物群や、門・柵を構えた武家住宅が描かれている[5]［工学院大学後藤研究室・鹿児島大学木方研究室・㈱アルセッド建築研究所編集協力2014］。当該絵図をさらに詳しく分析すると、図1-③に挙げたように、瓦葺きの土蔵、本屋根と下屋庇を共に瓦葺きにした建物、屋根付きの武家門、本屋根を茅葺き[6]にして下屋庇を瓦葺きにした武家住宅など、様々な建築物が描かれていることがわかる［橋口2017］。

### 3. 大崎・小松原の周辺図

図2には、加世田郷の大崎浦や小松原浦の周

図1-①

1 田地用水溝
2 街道（鹿籠坊泊通路）
3 人々の往来
4 笠
5 荷を載せた馬を引く人
6 飛び石
7 川（現在の加世田川）

図1-②

1 大楠（現存）
2 蘇鉄
3 階段
4 大門
5 仁王像（石造）
6 鎮守
7 塀
8 石垣
9 門
10 寺僧
11 箒で庭を掃く小僧又は使用人
12 箒
13 石灯籠
14 垣
15 橋
16 田地用水溝
17 街道（鹿籠坊泊通路）
18 人々の往来
19 笠
20 荷を載せた馬を引く人

図1-③

1 門前（日新寺門前地区）
2 門前者の住宅または商店か
3 茅葺き
4 土蔵（瓦葺き）
5 瓦葺き屋根が付いた門
6 瓦葺き
7 本屋根と下屋庇を共に瓦葺き
8 垣
9 門
10 吉見氏経営の商店（「吉野屋」または「芳野屋」）か
11 本屋根を茅葺きにして下屋庇を瓦葺き
12 柿本小路
13 屋根付きの武家門
14 麓郷士の武家住宅（武家屋敷）
15 橋
16 六地蔵塔（石塔）
17 階段
18 犬
19 天秤棒を担ぐ人
20 田地用水溝
21 街道（鹿籠坊泊通路）

図２：大崎・小松原の周辺図〔『再撰帳一の一』掲載「小松原吹上」絵図〕

1　吹上浜　　2　新川港（万之瀬川河口）　　3　松　　4　大崎浦　　5　街道（秋目街道）　　6　吹上（砂丘）　　7　小松原浦　　8　寄木浦（万之瀬川旧河口部）　　9　小松原の寄木八幡宮　　10　アラタ川（荒田川）に架かる橋

図 2-①

1　大崎浦　　2　松　　3　土蔵（瓦葺き）　　4　茅葺き　　5　本屋根を茅葺きにして下屋庇を瓦葺き　　6　垣　　7　長裾の衣服を着た人々　　8　荷を載せた牛を追う人　　9　人々の往来　　10　街道（秋目街道）　　11　荷を載せた馬を引く人　　12　瓦葺き　　13　吹上（砂丘）　　14　本屋根と下屋庇を共に瓦葺き

図 2-②

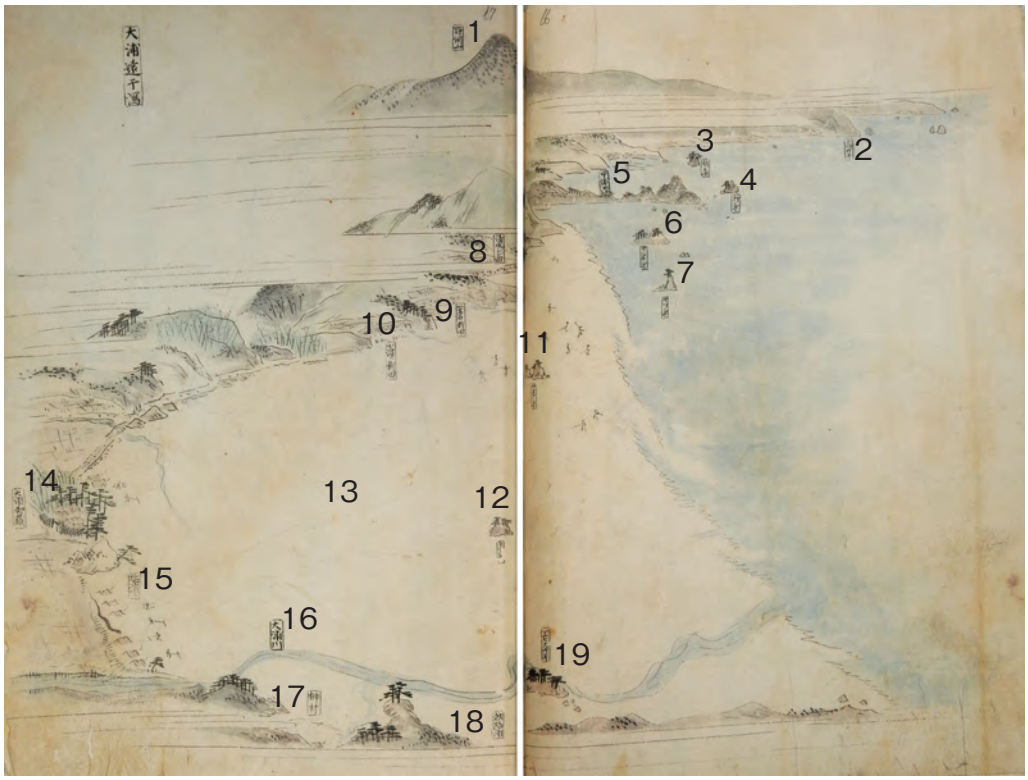
1　小松原浦　2　松　3　茅葺き　4　人々の往来　5　街道（秋目街道）
6　荷を載せた馬を引く人　7　垣　8　天秤棒を担ぐ人　9　笠　10　鳥居（朱塗り）　11　小松原の寄木八幡宮

辺、吹上浜などが描かれる[7]。この大崎・小松原の付近は、薩摩藩によって定められた「浦町」ではなく、単なる「浦」だったが、浦町に匹敵するほど繁栄し［原口虎雄 1960、上東 1986a］、その賑わい、人家の多さから、高木善助（薩摩を旅した大坂商人）の「薩隅日三州經歴之記事」の中などにも記録されるような「町」の様相を呈していた［宮本・谷川・原口編 1969、東條編 2016］。物資を運ぶ船舶が出入りした万之瀬川河口の新川港に近い大崎や、かつて万之瀬川の旧河口が所在した小松原には商人が多かった［上東 1964・1986a、神田 1964、満留 1964］。画面の大崎から小松原へと続く街道の両側には建物が建ち並び、路上には人々の往来が描かれている。その往来には、天秤棒のようなものを担ぐ人や笠を被っている人などのほか、荷を載せた馬や、荷を載せた牛の姿なども描かれている［橋口 2017］。大崎浦を描いた付近には、瓦葺きの土蔵とみられる建物が散見され、茅葺きとみられる建物や瓦葺きとみられる建物等が混在する様子などもうかがえる。一方、小松原浦を描いた付近には、土蔵や瓦葺きとみられる建物が大崎浦に比べて少ない。これは、万之瀬川の川筋変更に伴う、小松原から大崎への繁栄の遷移［神田 1964、上東 1986a］を反映しているとみられる。周辺に描かれる複数のマウンド状の地形は、「吹上」と呼ばれた砂丘で、当該地域の人々にとって、強い季節風などによる飛砂害との戦い［松山 1986、福永 2016］も生活の一部であった。

### 4. 大浦遠干潟の周辺図

図 3 には、加世田郷大浦の遠干潟（大浦潟）の周辺が描かれている[8]。図中にみえる「コイシマ」（恋島）や「フタコシマ」（双子島）は、現在では干拓が進んで地続きとなり、周囲の干潟も水田等に姿を変えている［永田 1995］。干潟が広がる大浦の湾奥に描かれているのは「塩濵」で、製塩道具［内匠 1995b］を用いて作業する人々の様子や、煙を上げる塩焚き竈（屋根付きの塩竈、塩焚き小屋）と考え

図３：大浦遠干潟の周辺図〔『再撰帳一の二』掲載「潮入遠干潟」絵図〕




1　野間岳
2　高崎
3　橘島
4　竹島
5　片浦湾
6　桟敷島
7　松島
8　清水新田
9　笠石新田
10　小濵新田
11　双子島
12　恋島
13　大浦遠干潟
14　大浦御蔵
15　塩濵
16　大浦川
17　榊村
18　越路浦
19　恵比須崎

図 3-①

1　大浦御蔵（年貢米収納蔵）
2　門
3　垣（柵）
4　松
5　塩濵
6　煙を上げる塩焚き竈（屋根付きの塩竈）
7　製塩道具を用いて製塩作業に従事する人々
8　天秤棒で運搬を行う人（製塩関連作業か）

られる建物群が描かれている［橋口 2017］。図中にみえる「小濵新田」・「笠石新田」・「清水新田」は、いずれも干潟の干拓によって造られた新田である［坂元 1992、内匠 1995ab、永田 1995］。画面左には、年貢米の収納に使用された「大浦御蔵」の姿も描かれている。

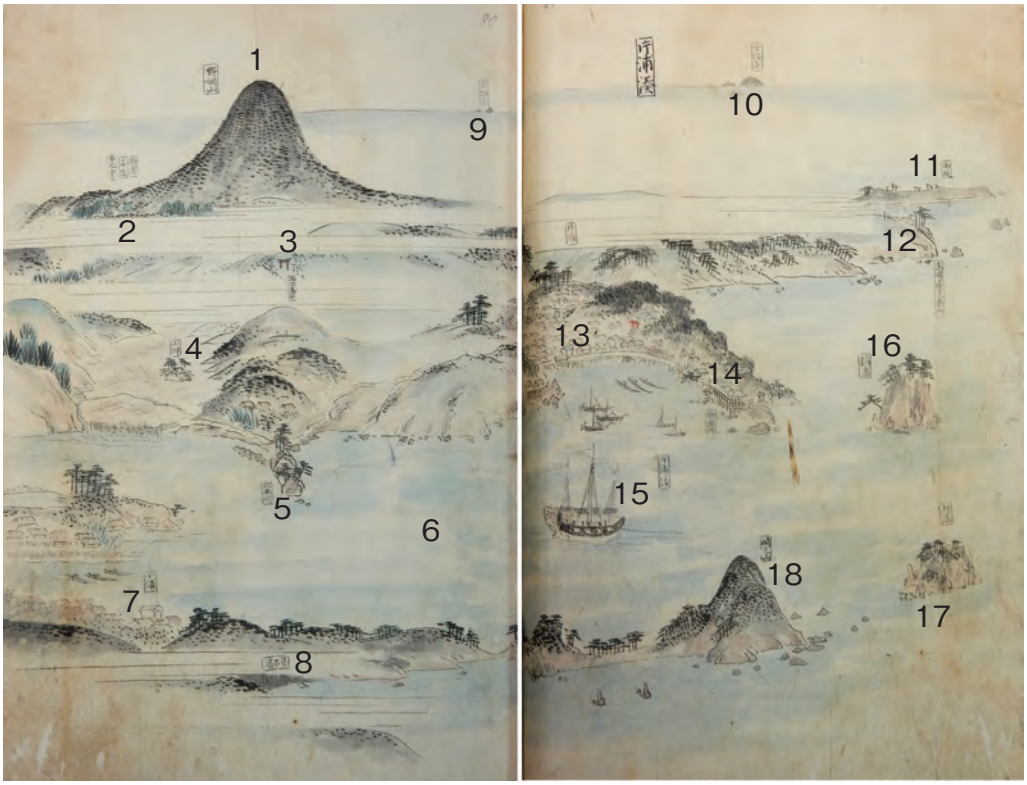
### 5. 片浦の周辺図

図 4 には、加世田郷片浦とその周辺の様子が描かれている[9]。片浦地区を描いた付近には、土蔵とみられる建物が確認でき、茅葺きとみられる建物や瓦葺きとみられる建物の混在の様子がうかがえる。

片浦の湾内には、碇泊する他の船（和船）よりも一段と大きく唐船（ジャンク船）が描かれている。近世の片浦にはしばしば唐船が漂着し［前床 1991b］、この図の唐船もこうした状況をふまえて描かれたものと考えられる［橋口 2017］。

湾口の付近には、燈台と船舶の出入りの管理などを行う「御番所」（片浦津口番所）［鹿児島県 1940、上東 1986a、前床 1991ac］が描かれている。画面奥には、航行する船を遠望して監視する「高崎遠見番所」［坊津町郷土誌編纂委員会 1969、上東 1986a、前床 1991a］や、馬の生産が行われた「御牧」（野間の馬牧）［鹿児島県 1940、上東 1986a、宮下 1991c］、当該地域の人々にも信仰された中国生まれの航海守護神「娘媽」（媽祖）ゆかりの「野間山」（野間岳）とその山中の「ノマ宮」（野間権現宮）、阿弥陀仏・娘媽（媽祖）順風耳・千里眼が祀られていたという野間権現宮の「本地堂」などが描かれる［宇宿 1936、鹿児島県 1940、李 1979、鶴添 1982、宮下 1991abc・1999、藤田 2004・2010、内匠 1995b］。さらに画面奥の東シナ海沖には、漁場としても利用された「宇治シマ」（宇治群島）や「草垣シマ」（草垣群島）の姿も描かれている。

図 4：片浦の周辺図〔『再撰帳一の二』掲載「片浦港」絵図〕




1　野間岳　2　野間権現宮・本地堂・坊舎　3　野間権現一之鳥井　4　山神　5　仁王崎　6　片浦湾　7　小浦　8　碁石濵　9　草垣群島　10　宇治群島　11　御牧（野間の馬牧）　12　高崎遠見番所　13　片浦　14　御番所（片浦津口番所）　15　唐船（ジャンク船）　16　橘島　17　竹島　18　崎之山

図 4-①

1　片浦　2　茅葺き　3　土蔵（瓦葺き）　4　護岸（石垣）　5　瓦葺き　6　階段　7　鳥居（朱塗り）　8　片浦十二所宮（野間権現近戸宮）　9　松　10　小舟　11　和船〔帆船〕　12　唐船の旗　13　唐船（ジャンク船）　14　御番所（片浦津口番所・瓦葺き）　15　垣　16　燈台　17　高崎遠見番所　18　橘島　19　竹島　20　崎之山

## 6. おわりに

これまでみてきたように、『再撰帳』所載の絵図からは、近世加世田郷の様子、郷内での人々の暮らしがうかがえる。

『再撰帳』所載の絵図には、薩摩藩で編纂された『薩藩名勝志』や『三国名勝図会』所載の絵図と異なり、地元の郷でまとめられた資料ならではのリアリティ、ビビッドな情報が盛り込まれている。例えば、日新寺の前に流れる川を人々が渡河するために設けられた素朴な飛び石。藩法上「浦町」ではなく、「浦」の扱いしか受けていなかった大崎・小松原における「浦町」のような賑わいの様子。片浦の港に浮かぶ唐船（ジャンク船）の姿。これらは、『薩藩名勝志』や『三国名勝図会』所載の絵図からはうかがい知ることのできない近世加世田郷の姿である［橋口 2017］。

また、彩色が施された『再撰帳』所載の絵図には、単色の絵図からは読み取れない、重要な色彩情報が付加されているという点でも、当該絵図の持つ史料的価値は高い［橋口 2017］。

いずれにせよ、近世の薩摩藩内における庶民の生活を描いた絵画史料がごく限られている現状において、『再撰帳』所載の絵図は、近世薩摩藩内の諸郷（外城部）における人々の生活の様子を探る上で、極めて貴重な史料と言えよう。

【注】

(1) 『再撰帳』の絵図は、『加世田市誌』上の「凡例」［加世田郷土誌委員会編 1964］をはじめ、これまでにも諸所で掲載・紹介されている。2017（平成 29）年に開催された南さつま市加世田郷土資料館の企画展（パネル展示）「加世田郷の絵図」では、『再撰帳』掲載絵図の紹介・解説が行われた。

(2) 「いにしへだより No 1」（『市報 南さつま』140 の 27 頁）では、当該絵図の部分写真が掲載され、その写真の各所に①～③の番号が振られ、「①門に仁王像。廃仏毀釈の際に阿形像は加世田麓に移された」、「②現在も残る大楠」、「③本堂が茅葺き」という説明が加えられている［総務企画部企画政策課編 2017］。

(3) 当該用水溝は、益山用水溝や加世田用水溝とも呼ばれる［前原 1964、東 1986］。

(4) 鹿籠（現在の枕崎）・坊泊へ続く街道。

(5) 2014 年 3 月「鹿児島県 南さつま市」発行の、『加世田のまちなみ調査報告書』33 頁～39 頁の「加世田麓地区の歴史的環境」（同報告書にはこの「加世田麓地区の歴史的環境」について「以下の文章は、南さつま市教育委員会生涯学習課の福永裕暁氏により、第 2 回委員会時に「加世田麓の歴史的環境」という題目で講演していただいた内容をとりまとめたものである」と記されている）では、当該絵図のうち、六地蔵塔の周辺部分の絵図の写真が掲載され、写真中に「六地蔵塔」の文字が付加されており、「六地蔵塔付近には現在の柿本小路らしき通りがあり、その南側一帯には、商家であろう土蔵を備えた建物群が 3 群ほど描かれているが、これらが現在の社付集落の原形である。その北側には門や柵を構えた武家住宅が描かれているが、現在のように建物が密集した状況ではないため、建物の増加は明治以降だったと思われる」と説明されている［工学院大学後藤研究室・鹿児島大学木方研究室・㈱アルセッド建築研究所編集協力 2014］。

(6) 本稿で「茅葺き」と表現した建物の中には、茅以外の草葺きや板葺きなどが含まれている可能性がある。

(7) 『加世田市史』上の 248 頁に、「図-7　天保年間の大崎、小松原（再撰帳）」と題して、当該絵図の写真が掲載されており、写真中に活字で「小松原吹上」・「寄木八幡」・「小松原浦」・「大崎浦」・「吹上」の名が付記されている［上東 1986a］。また、『万世歴史散策』の 144 頁には、『再撰帳一の一』の「小松原吹上」の条の写真と共に、当該絵図の写真が掲載されている［窪田 2012］。

(8) 『大浦町郷土誌』の 347 頁に、「図 5「幕末の大浦海岸と下代蔵」（「大浦遠干潟－加世田再撰帳」から）」と題して、当該絵図の概略図が掲載されており、この概略図中には活字で「塩浜」・「大浦御庫」・「小浜新田」・「笠石新田」・「恋島」などの名称が付記されている［内匠 1995a］。

(9) 『薩藩名勝志』・『薩藩勝景百図』・『三国名勝図会』に収載される片浦港の図は、いずれも北方向から片浦の湾を鳥瞰した構図であるが、当該図は東方向から片浦の湾を鳥瞰した構図となっている。

【引用・参考文献】


相徳隆 1986 「第 14 編　文化財・人物／第 1 章　指定文化財」加世田市史編さん委員会編『加世田市史』下、加世田市

上東三郎 1964 「第 6 編　交通・通信誌」加世田郷土誌委員会編『加世田市誌』上、鹿児島県加世田市役所

上東三郎 1986a 「第 4 編　近世」加世田市史編さん委員会編『加世田市史』上、加世田市

上東三郎 1986b 「第 9 編　交通・通信」前掲『加世田市史』上

宇宿捷 1936 「媽祖の信仰と薩南片浦林家の媽祖について」『史学』15-3

鹿児島県 1940　鹿児島県『鹿児島県史』2、鹿児島県

加世田郷土誌委員会編 1964 「凡例」前掲『加世田市誌』上

神田三郎 1964 「第 10 編　名勝旧跡誌」加世田郷土誌委員会編『加世田市誌』下、鹿児島県加世田市役所

窪田巧 2012『万世歴史散策』「万世歴史散策」編集委員会

工学院大学後藤研究室・鹿児島大学木方研究室・㈱アルセッド建築研究所編集協力 2014 『加世田のまちなみ調査報告書』鹿児島県南さつま市

坂元春男 1992 「第 1 編　産業／第 1 章　農業／第 4 節　土地基盤整備／二　大浦潟干拓」笠沙町郷土誌編さん委員会編『笠沙町郷土誌』下、笠沙町

鮫島睦次郎 1986 「第 12 編　宗教」前掲『加世田市史』下

諏訪秋千代・上東三郎・橋口純美 1964 「第 2 編　沿革誌」前掲『加世田市誌』上

総務企画部企画政策課編 2017 「いにしへだより No 1」『市報 南さつま』140（7 月号）　南さつま市役所

高津孝 2010 「第三部　東アジア文化圏と薩摩／四　地誌の学と名所図会 ―― 薩摩の名所図会」『博物学と書物の東アジア―薩摩・琉球と海域交流―』（琉球弧叢書 23）　榕樹書林

内匠進 1995a 「第 6 章 大浦町の近世関係資料／第 3 節 近世農民のくらし／六 農民の負担」大浦町郷土誌編纂委員編『大浦町郷土誌』大浦町

内匠進 1995b 「第 6 章 大浦町の近世関係資料／第 5 節 近世資料雑／六 小浜の製塩資料」前掲『大浦町郷土誌』

土持鋤夫 1939 『加世田の歴史　神代より藩政時代に至る』南薩郷土出版協会

鶴添泰蔵 1982 「南九州の媽祖聞書」『隼人文化』11

東條広光編 2016 『大坂商人旅日記　薩陽紀行――文政・天保期の南九州への旅』鹿児島学術文化出版
徳留鑑一・高津孝 2000 「諸郷再撰帳一覧（郷名及び順序は『三国名勝図会』による）」『江戸のまなざし　薩摩の名所図会展図録』（平成 12 年度鹿児島大学図書館貴重書公開）鹿児島大学附属図書館
永田英彦 1995 「第 8 章 大浦の墾田関係資料（干拓史）」前掲『大浦町郷土誌』
橋口純美 1964 「第 9 編　宗教誌」前掲『加世田市誌』下
橋口亘 2017 「鹿児島県南さつま市加世田郷土資料館蔵『再撰帳』掲載絵図に描かれた近世薩摩国河邊郡加世田郷」『南日本文化財研究』27
原口虎雄 1960 「第 2 編　吾平の歴史／第 5 章　近世の吾平／第 4 節　野町について」（「薩藩町方の研究（第 1 部）―商業の組織と流通関係の実態について―」）鹿児島県肝属郡吾平町誌編纂委員会編『吾平町誌』上、吾平町
東藤郎 1986 「第 6 編　産業経済／第 1 章　農地農政」前掲『加世田市史』上
福永裕暁 2016 「いにしへを訪ねて№ 25　吹上浜砂丘」『市報 南さつま』132（11 月号）　南さつま市役所
藤田明良 2004 「日本列島所在の古媽祖像データベース ―― 九州・沖縄編」『8-17 世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流 ―― 海域と港市の形成、民族・地域間相互認識を中心に（上）』東京大学大学院人文社会系研究科
藤田明良 2010 「日本近世における古媽祖像と船玉神の信仰」『媽祖に関する調査報告書』長崎県文化・スポーツ振興部
坊津町郷土誌編纂委員会 1969 『坊津町郷土誌』上、坊津町
前床重治 1991a 「第 2 編　通史／第 4 章　近世／第 1 節　加世田郷の支配体制」笠沙町郷土誌編さん委員会編『笠沙町郷土誌』上、笠沙町
前床重治 1991b 「第 2 編　通史／第 4 章　近世／第 2 節　海外交渉の窓―薩摩の浦々―」前掲『笠沙町郷土誌』上
前床重治 1991c 「第 2 編　通史／第 4 章　近世／第 4 節　浦のしくみと浦人」前掲『笠沙町郷土誌』上
前原政二 1964 「第 7 編　土木誌」前掲『加世田市誌』上
松山賢太郎 1986 「第 14 編　文化財・人物／第 2 章　一般文化財」前掲『加世田市史』下
満留重雄 1964 「第 11 編　人情風俗誌」前掲『加世田市誌』下
宮下満郎 1991a 「第 2 編　通史／第 4 章　近世／第 9 節　近世末期の神社と寺院」前掲『笠沙町郷土誌』上
宮下満郎 1991b 「第 2 編　通史／第 4 章　近世／第 10 節　娘媽神と野間権現」前掲『笠沙町郷土誌』上
宮下満郎 1991c 「第 2 編　通史／第 4 章　近世／第 11 節　江戸時代の名所・旧跡」前掲『笠沙町郷土誌』上
宮下満郎 1999 「解題」『譯司冥加録・漂流民関係史料』鹿児島県史料集 38、鹿児島県立図書館
宮本常一・谷川健一・原口虎雄編 1969『日本庶民生活史料集成』2（探検・紀行・地誌　西国篇）、三一書房
李獻璋 1979 『媽祖信仰の研究』泰山文物社

【史料】

『加世田名勝史』（『加世田名勝志』）：南さつま市加世田郷土資料館蔵
『再撰帳』：南さつま市加世田郷土資料館蔵
『再撰史』：南さつま市加世田郷土資料館蔵
「薩隅日三州經歷之記事」：宮本常一・谷川健一・原口虎雄編 1969『日本庶民生活史料集成』2（探検・紀行・地誌　西国篇）、三一書房
『薩藩名勝志』：鹿児島大学附属図書館蔵
『三国名勝図会』：山本盛秀編 1905（五代秀尭・橋口兼柄 1843）『三國名勝圖會』山本盛秀